荒川線庚申塚の場

初めて東京へ行ったのは、今から三十五年前のことである。そのころはまだ、都内の各所で都電が走っていた。本郷三丁目から本郷追分まで乗ったのを憶えている。今や都電は、早稲田−三ノ輪間を走る荒川線を残すのみである。早稲田大学にはしょっちゅう行くが、荒川線に乗ったことはまだなかった。今度こそはと、荒川線に乗り込んだ。一昨年の春、小雨模様の日だった。

電車はゴトンとひと揺れし、ゆっくりと走り出した。ちょうど伊予鉄の環状線に乗っているような感じだ。「次は庚申(こうしん)塚」という案内を聞いて、これは降りてみなければと思った。なぜそう思ったのだろうか。

故川島武宜教授に『日本人の法意識』という名著がある。この本に河竹黙阿弥作「三人吉三廓初買(くるわのはつがい)　庚申塚の場」が引用されている。その場面とは、こうだ。まずお嬢吉三が夜鷹を殺して百両を奪う。脇から見ていたお坊吉三が百両を俺によこせと言い、両者の争いになる。割って入ったのが、悪党仲間では名の高い和尚吉三。和尚が奇想天外な案で両人の争いを納めるという筋書きだ。川島氏は、この場面に日本人特有の紛争解決の仕方が集約されていると述べる。私も授業で毎年、歌舞伎の一場面を再現しながら川島理論を説明しているという訳で、忘れられないくだりだ。

ここがあの庚申塚なら見逃せないと、下車したのである。帰郷してから確かめると、「三人吉三」の舞台は大川端すなわち両国の庚申塚と知れた。とんだ勘違いだったわけだ。

それはともかく、降りてみると駅前は商店街だった。関西とちがって、関東の商店街はアーケードがない。庚申塚にお参りしたあと、新庚申塚駅まで歩いた。何気ない小トリップだったが、息子が二年後この近くに居を構えることになろうとは、当時は知るよしもなかった。